

自由論題 2「台湾の政治」・報告 1

報告テーマ

台湾民主国田賦軍統領徐驤の思想

: 客家人意識、台湾人意識、台湾愛国主義思想、台湾民族主義思想

The Thought of the Republic of Formosa the Tianfu Army Commander Xu Xiang
: The Hakka Consciousness, the Taiwanese Consciousness, the Thought of Taiwanese
Patriotism, the Thought of Taiwanese Nationalism

氏名(所属)

伊藤 幹彦

要旨(800字程度)

徐驤はいかなる思想をもっていたのか。

第一に台湾人の団結。清代台湾で閩南人、漳州人、泉州人、客家人が分類械闘をしていたが、1895年の戦争を機に四族群は団結し、7月8日の新竹城戦で陳澄波軍、徐驤(客家人)軍、楊載雲(唐山人)新楚軍は協力し、8月28日の八卦山戦で劉得勝軍、徐驤(客家人)軍、吳湯興(客家人)軍は日本軍と戦った。七星隊隊員は唐山人、泉州人、漳州人、閩南人で、それぞれ唐山人意識、泉州人意識、漳州人意識、閩南人意識をもち、台湾人意識をもっていた。ゆえに徐驤は客家人意識と台湾人意識の二重意識をもっていたことになる。

第二に徐驤の二重意識。文天祥の「生死の問題はどうして論ずるに足りるか(生死安足論)」は、徐の「徐は生死の問題を度外視せり(生死早置度外)」と同じである。文の大義は宋愛国主義で徐の大義は台湾民主国愛国主義である。客家精神に愛国主義があり、文も徐も客家人でこれらの言葉からも文にも徐にも客家人意識があることがわかる。客家精神に死を恐れない精神があり、文も「早く死刑にせよ」とフビライに求め、徐も「英雄は国のために死すとも悔いなし」と言い、文も徐も死を恐れない精神があり、客家人意識があることになる。それゆえ、徐驤には客家人意識と台湾人意識の二重意識があり、台湾愛国主義思想もあることになる。

第三に徐驤の国家観。徐驤の「台南政府を守らずば、台湾は滅ぶ。台湾たる土地と存亡をともにせん。国家の存亡はすべての人の責任」は、徐驤が台南政府防衛を主張し、(台湾民主国の)領土と運命を共にすると言い、国家の存亡は、全国民の責任であると述べ、台湾民主国を国民国家にしようとした点から、台湾人意識と台湾民族主義思想(台湾人の国づくり)が表れ、徐驤には台湾人意識と台湾民族主義思想と台湾愛国主義思想があったことになる。

徐驤には客家人意識、台湾人意識、台湾愛国主義思想、台湾民族主義思想があったことになる。